

# 近世浄土真宗寺院本堂の研究 (そのV)

徳正寺本堂と行徳寺本堂

岡野清

## STUDY OF MAIN HALL IN THE JYODOSHIN SECT IN EDO PERIOD (PART V)

Kiyoshi OKANO

徳正寺本堂 稲沢市大池町北浦1999

この寺は真宗大谷派に属し、昔時は天台宗の寺院として古い由緒をもつが、文永元年(1264)に浄土真宗に転じ、知多郡大野の光明寺末になり、現在に至ったことが寺伝で知られる。

現本堂の建立については、明治24年の濃尾大地震で倒れたのでこれを廃毀して、宝飯郡御馬村入覚寺本堂を購って移築し、明治30年10月(1897)完成入仏したと言う。移転再建の記録は屋根裏の棟札、梵鐘銘及び仏壇裏墨書による。

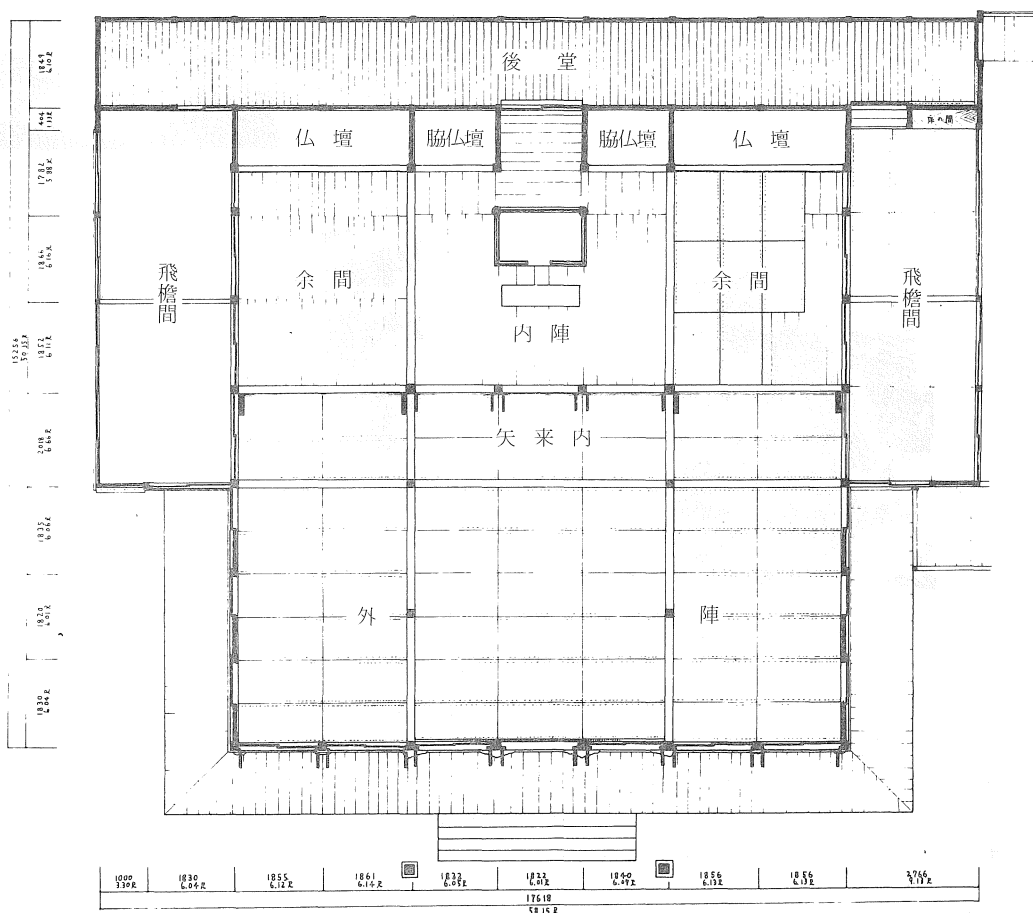


図1 徳正寺本堂現状平面図

内陣北脇仏壇前板裏墨書に

「明治三十年……参河宝飯郡御宿村石黒……正信」とあり、北余間仏壇前板裏墨書には

□□□愛知県参河□宝飯郡御宿村石黒小□正信

とあり、震災で崩壊後、新築再興することが難しく、同宗同派の入覚寺から譲り受けたものと思われる。このことについて入覚寺を調査したが、引渡した本堂の建立等についての詳細は不明であった。

#### 規模 構造

本堂は桁行7間、梁間7間で、前半梁行4間を外陣、後半梁行3間を内陣及び余間とし、内陣間口3間、両余間間口各2間とし、前面中央3間に1間の向拝をつけ、外陣正側3面に落縁を廻らし、現在後方内陣及び余間部分の南北側面に1間半、西背面に1間の下屋を設け、左右飛檐間や後堂にあてる(図1)。軒は二軒半繁垂木、屋根は入母屋造棧瓦葺である。

向拝は几帳面取角柱、上下に粽がつき、柱下に石製礎盤を入れ、柱間に渦、若葉をつけ、袖切、欠眉、錫杖彫を施した虹梁を入れ、象鼻を出し、唐様実肘木つきの連三斗々拱をあげ、中備に褰股を挿入する。正面木階4級である(写真1)。

軸部は来迎柱のみ円柱であるが、その他は全て面取角柱で、外陣外廻りでは1間毎に柱を入れ、縁長押、敷鴨居、内法長押、飛貫、桁が巡り、内法長押上は土壁、漆喰塗(写真2)。但し正面3間では内法を高くし、

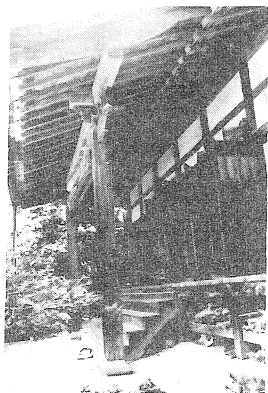


写真1 向 拝

内法長押を用いず、楣を入れる(写真3)。正面各間では縁長押及び楣または内法長押に葉座を打添えて棧唐戸を釣り、その内に接して腰高障子を引違いに入れ、側面各間に舞良戸を引違いに入れ、3本溝とし、内側に腰高障子1枚を入れる(写真2)。

内部の外陣では内陣余間前の1間通りを矢来内とし、外陣を桁行に3分し、中央を3間、両側を各2間に分け

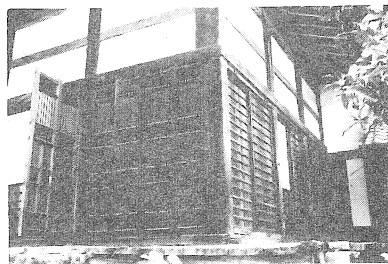


写真2 外陣外東北隅

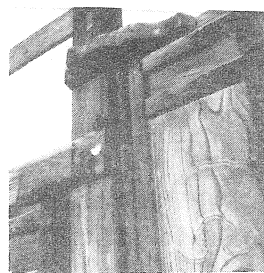


写真3 正面中央間の内法を一段高くした棧唐戸



写真4 正面中央間の扉構え下部



写真5 外陣から矢来上の繫虹梁、内陣前の欄間、内陣を見る

て柱列を作り、柱列の柱間隔を内陣前では1間とし、残る部分では1間半割に配し、内陣及び余間境の1間手前の柱間には桁行に繫虹梁を通し(図1、写真5)、手前3間では柱間に梁行に繫虹梁を入れて矢来通り柱で終らせる。虹梁は渦若葉つき袖切、欠眉を施し、梁行のものと略背違いに矢来通りの桁行梁を上に通す。天井は棹縁天井であるが、矢来内では棹を桁行に通し、手前では梁行に通し、柱列上には天井桁を入れる(写真5)。

内陣余間では床を長押1段分高め、内陣では更に敷居1段分高くし、これに従って内法長押も背違いに高くし、内陣前では1間毎に柱を立て(写真5)、余間前は

2 間持離しにして釣束で鴨居を釣り (写真 6), 柱及び束には粽をつけ, 頭貫, 台輪を通し, 柱間には双折又は四折の卷障子を嵌め, 内法長押と頭貫の間には金箔置き法輪の高肉彫の欄間を入れ, 柱上及び束上には出三斗斗拱を組み, その肘木は絵様 (渦巻) つきとして, 実肘木をのせ, 前方へ出た肘木上巻斗上には出桁に平行して実肘木をおく。中央間のみには彫刻からなる基股を飾る (写真 7)。矢来内の両妻は襖引違いとする (写真 8)。

内陣では背面両脇に脇仏壇を設け, 脇仏壇上には渦, 若葉, 袖切, 欠眉つきの虹梁を渡してその上を小壁とし (写真 9)。中央 1 間には後門を設け, 敷鴨居に引違い障子を入れる。脇仏壇前の前面から半間前には円柱の来迎柱を立て, 上部に粽をつけ, 来迎柱間及び脇仏壇前柱との間に頭貫と台輪を渡し, 頭貫端木鼻, 台輪端を花頭形

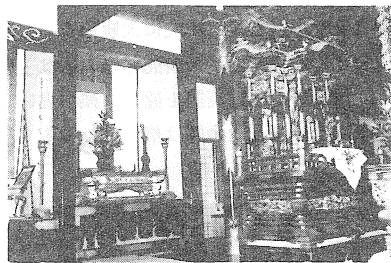


写真 9 内陣脇仏壇

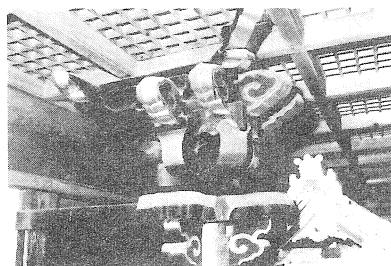


写真 10 内陣来迎柱上斗拱

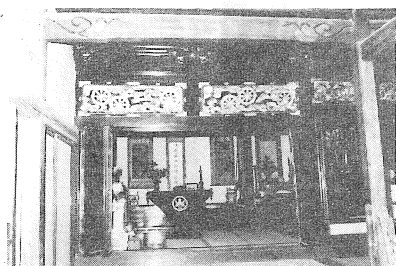


写真 6 外陣より南余間正面をみる



写真 7 内陣正面

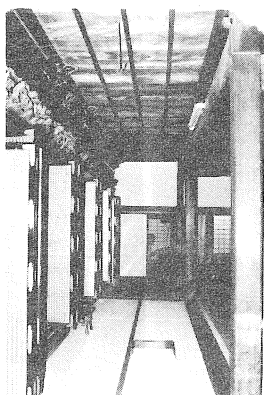


写真 8 矢来内で南より北をみる

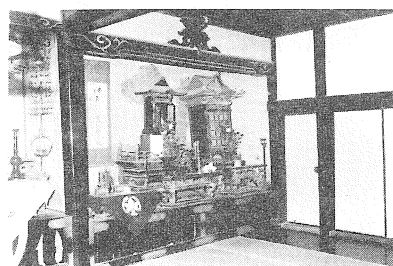


写真 11 北余間仏壇



写真 12 向拝虹梁端部

につくり, 柱上には出組斗拱, 拳鼻, 実肘木つき (隅行肘木上菊斗つき) を上げ (写真 10), 余間との境には角梁を入れて両端柱に添木をしてこれを支え, 天井は板支輪つきの小組格天井とし (写真 10), 柱, 頭貫, 台輪, 斗拱, 虹梁, 梁等がすべて黒漆塗, 絵様金箔置きであるのに対し, 天井は素木とし, 来迎柱上の斗拱とは全く一致しない割付けをとる。後門前の入込み部分及び脇仏壇上の天井は棹縁天井。

余間背面は仏壇として渦、若葉、袖切、欠眉つきの虹梁をあげて上を小壁とし、中央に大瓶束を立てて笈形を配し、内陣との境は開放、飛檐間との境には1間毎に柱を入れて、敷鴨居、内法長押を通し、襖引違いとする。天井は南余間向は棹縁、北余間は格天井である(図1、写真11)。

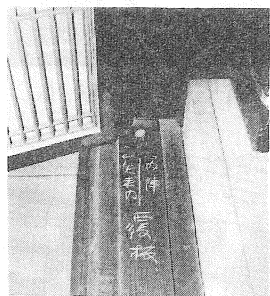


写真13 A. 矢来内、内陣との境、双折巻障子仕切りであるが、覆板を外すと敷鴨居の元の2本溝が見え、引違い格子戸があった。



写真13 B. 矢来内と余間の境、覆板の下は二本溝の敷居で、4本建ての格子戸があった。

### 復元的考察

本堂を復原すると、現向拝は大虹梁及び桁を明治30年以後新造し、向拝の間口を3間に広くしてあるが、もとは2間半弱であった。本堂正面軒桁下端のその位置に繋ぎの海老虹梁を受けた束を立てた枿穴があり、向拝柱にはその海老虹梁の取付口が残る。明治に取替えられた大虹梁は材も新しく、渦、若葉も時代が新しい(写真1、12)。

正面中央3間は方立つきの双折棧唐戸であるが、両脇各2間と側面前より3間には笹戸がつけられ(鴨居或は内法長押に吊り金具取りつき痕跡あり、写真2)内側には何れも障子を入れており、矢来内の南妻は三本溝で、戸2、障子1を嵌め、北妻は二本溝であるから、戸襖引違いとしていた。又内陣及び余間前は引違及び4枚建ての格子戸となり(敷鴨居に板を打って溝を隠している)、柱が上に通って斗拱はなくなり(前面には嵌め込んだ斗

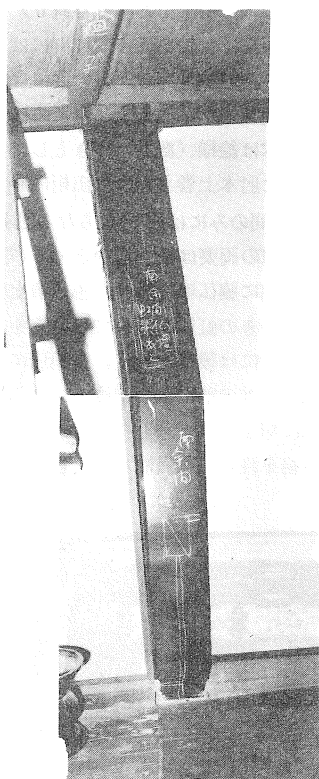


写真14 南余間の柱にのこる旧仏壇の框と虹梁取りつき痕跡と天井廻り縁

拱が現在あるが、内陣側は柱が天井まで通っている)、内法長押との間が壁となって、飛貫が飾り貫となって残ったか(内陣前では欄間を入れるため旧飛貫下を欠き取っている)、欄間が飛貫下のみに入ったかも知れない。又内陣余間の奥行は2間となり、余間仏壇、内陣脇仏壇も半間前に出て(柱に虹梁や仏壇框のとりつき痕跡がある写真14)。来迎壁はなくなり、その前に接して角柱が立ち(床下に角柱の下部が残る)、内陣背面に三つの仏壇が余間の仏壇と一直線に続く(写真15)。又内陣と南北

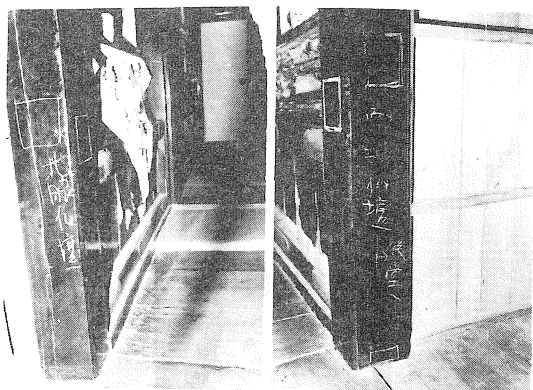


写真15 一直線仏壇の框取りつき痕跡

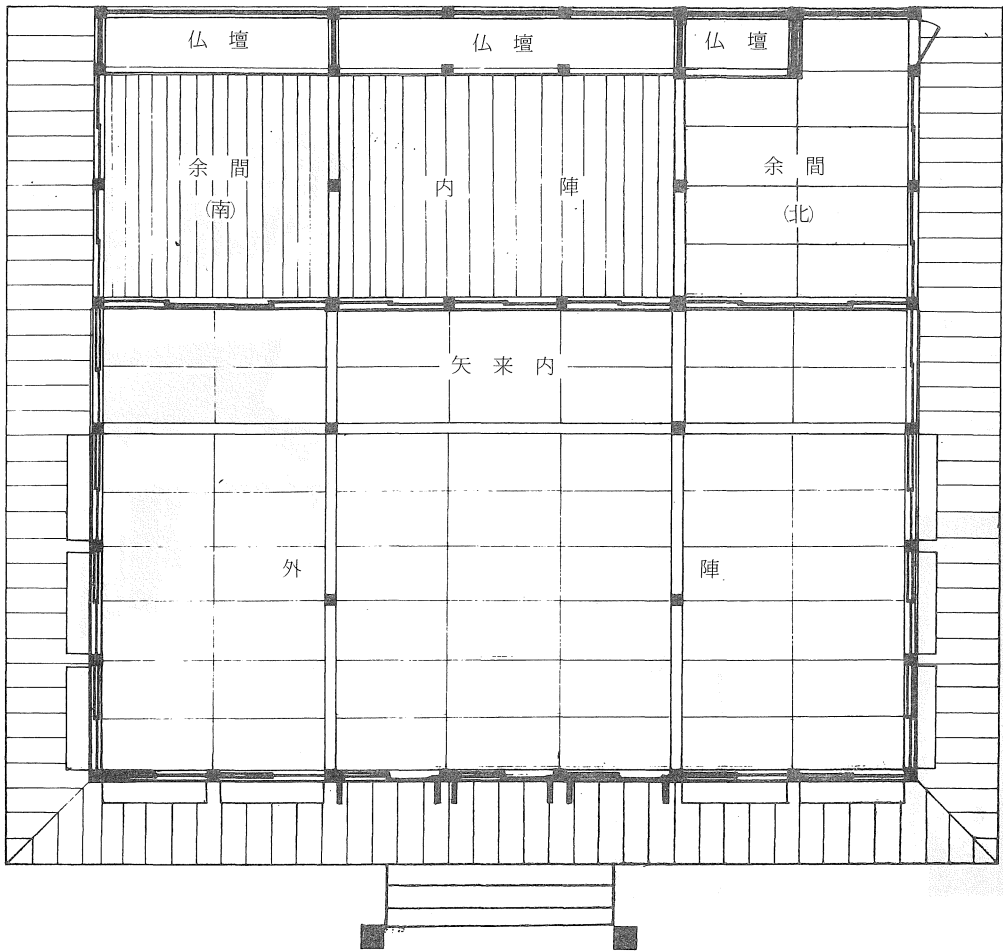


図2 徳正寺本堂復原平面図

余間境の柱の上部が（旧脇仏壇前柱と内陣前柱との中央にあったもの）現在、天井下20cm程のところで切断され、その下に大梁を入れ、現内陣余間境前後の柱で担われているので、もとそこに柱が立っていたことがわかる（写真16）。

北余間でも現在の仏壇上虹梁は半間前にあったが、仏壇は内陣側から見付1間で終り（向いの柱に仏壇框の取付痕跡がない）、北1間は入込みになっていて北側の半間

から片開戸によって外へ出るようにされていた（図2）。

側背面に下屋がなかったことはその部分の柱の風蝕によって知られるが、側面には濡縁がまわっていたと察せられる。縁との境の敷鴨居が2本溝で建具は戸襖を用いていたと考えられる。

内陣、余間の天井はこの状況から察すると、南余間同様棹縁天井であったであろう。

以上により平面を復原すると図2のようになる。

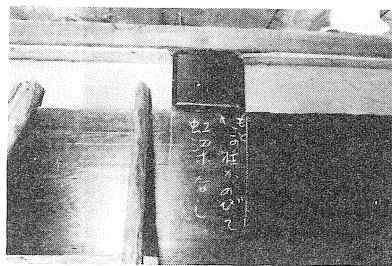
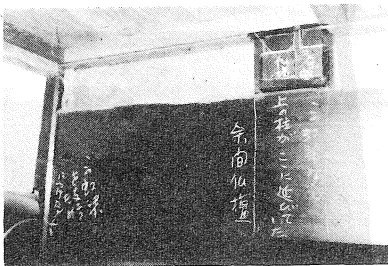


写真16 内陣余間境、旧柱を切断して大梁で担っている

行徳寺本堂 豊田市室町3-68

創立 沿革

真宗大谷派で寺の過去帳には享禄6年(1528)の開基で、寛文3年(1663)に寺号を許され、延宝5年(1677)に現木造本尊の下附を受けている。現本堂は棟札によれば享保5年(1720)の再建である。嘉永6年(1853)の再建棟札もあるが、この時に屋根小屋組を取替え(現堂の小屋部分は古材をとり混ぜた新材で架構し直されている)、内陣余間を半間後方に拡げ、矢来内を左右両側へ半間押拡げて余間前面2間を開放し、前面に広縁と向拝を新設して更に飛檐間や後堂を整備する等、堂の全容が変わる程の大改造が加えられ、屋根も棧瓦葺に改められたので、再建の棟札を掲げたものであろう。(写真2)。



写真1  
享保5年本堂再建の棟札



写真  
嘉永6年本堂大改修の棟札



写真2 行徳寺本堂正面

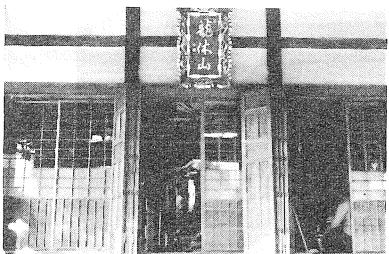


写真3 広縁正面



写真4 外陣南催面



写真5 南矢来内南端部と飛檐間外面

#### 規模 構造

堂は半ば南に振った形で東面し、桁行6間、梁間6間半で、屋根寄棟造棧瓦葺、前面に柱間2間半の向拝が取りついている。向拝は広縁外柱から向拝柱までの、張出し8尺、軒は2軒半繋垂木、向拝柱は太い樺の几帳面取で、上下粽つき、石製礎盤つき、虹梁及び海老虹梁は小判型断面の松材で、中央がやや起り、海老虹梁はやや力強く曲がり、彫の深い渦、袖切の若葉、深い欠眉、虹梁

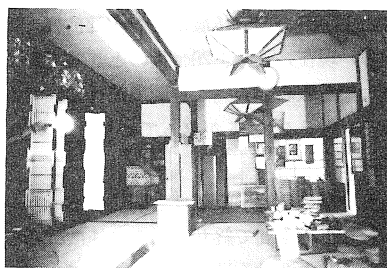


写真6 A, 外陣全景

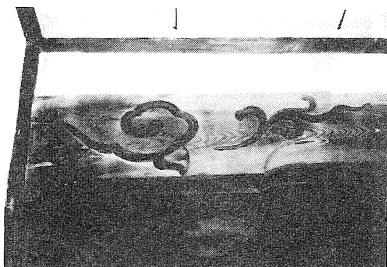


写真6 B, 同上桁行虹梁端の絵様

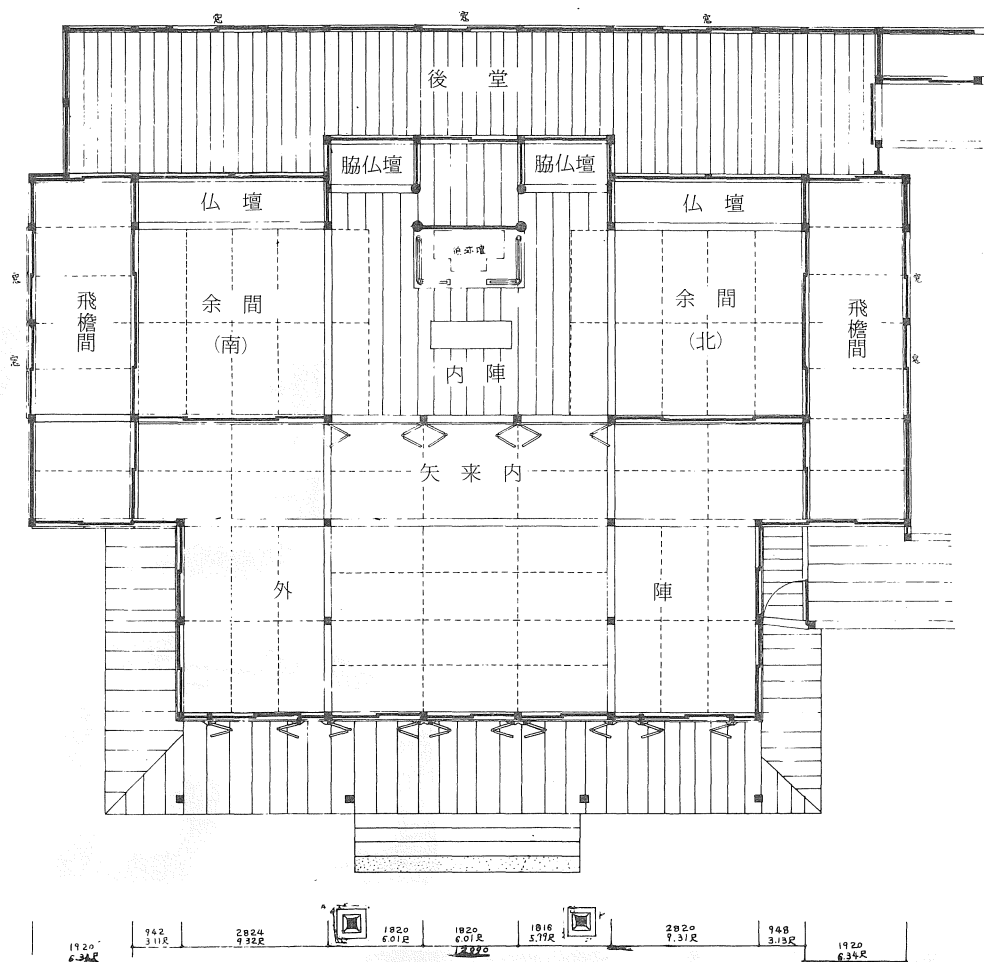


図1 行徳寺本堂現状平面図

下の錫杖彫、及び虹梁方向にのみ出した丸彫象鼻様木鼻は嘉永6年頃の様式をよく顕わしている。墓股はなく実肘木付連三斗で太い松の軒桁を受け、手挟みはない。階段は石と木で4級、高欄類はない(写真2)。

外陣の正側面外廻りは前面1間は吹放ち、側面は庇下濡縁となっていて、戸締りは外陣正側3面で為し、正面の中央の3間は各1間毎に双折棧唐戸を柱際に打った藁座で釣り、その内側に敷鴨居を入れ、内外に内法長押を打ち、建具内法高は正側3面とも同じで、桁から漆喰塗で中段に飾り貫をみせた小壁が下り、正面中央には龍休山の偏額を掲げる(写真3)。正面中央間の左右の各1間半ではその中央に1間の引違障子が入り、障子の両端を方立柱と板壁でふさぎ、方立柱上の内法長押下に藁座を打って双折棧唐戸を釣る。外陣両側面は1間毎に柱が入り、引違硝子障子で戸締りし、その外に雨戸を引く(写真4、5)。

矢来内南端の突出部分及び飛檐間の下屋部分は南側トタン張り、東面は鴨居上に虹梁が入り、上方に曲り梁を架けてその間を漆喰壁とし、虹梁下は雨戸2本を嵌め殺

しとし、縁の突当りに硝子戸を入れて矢来内へ出入する(写真5)。

外陣の間口は6間、奥行3間、内奥1間を矢来内とし(写真6)、矢来内から奥では側背面に各1間半の下屋をつけて、外陣よりも余間を半間外に出し、後堂や飛檐間に当てている(図1)。

柱は来迎柱とその後に対向する脇仏壇柱は丸柱、その他は面取角柱、広縁前では正面を3スパンに分け、中を2間半、左右を各1間と3/4にとり、外陣柱筋と中2本の柱は喰違い、向拝は2間半をとる(写真7)。

外陣は桁行に3分して中央間を3間にとり、両側を各1間半とし、外陣内部に柱列を設け、内陣の中央、両余間境の線の延長と一致する。外陣奥1間は内陣に添って細長く矢来内とする(写真6)。その部分では左右両端を半間外に拡げて余間の外端に揃え余間の間口2間に応じる(図1)。

余間は奥行2間で背後に奥行半間の仏壇を設け(写真8、9)、内陣では奥行を2間半として背後に脇仏壇をとり(写真10)、その間に後門を開き、脇仏壇より半間

前に来迎柱を立てて前に唐様須弥壇を置いて宮殿を載せる(写真10)。内陣余間の木部は黒漆塗、絵様は金箔押しで仕上げる(写真10)。

外陣矢来通りには桁行に繫虹梁を入れ、前2間では柱列間に一段低く梁行に貫を通し、天井は棹縁天井とし、(最近その下に鏡天井を張る)、矢来内は鏡天井とする(最近張りかえる、写真6)。

内陣外陣境には1間毎に柱を立て、内陣床を床長押及敷居分だけ高め、敷鴨居(無目)内法長押を入れ、巻障子を嵌め、欄間に高肉彫に刻を入れる(写真11, 12)。

余間は内陣より地長押の背を縮めて床をやや低くし、外陣との境には4本溝の敷鴨居に柳格子4枚を建てて、釣束で二分された欄間は箴欄間であるが、両脇に板の羽目を入れる(写真13, 14)。

内陣来迎柱上には頭貫台輪を置き、脇仏壇前には渦、若葉、袖切、欠眉入りの虹梁を架け(写真16)、脇仏壇虹梁と来迎壁台輪上には出三斗斗拱を載せ、格天井を張る(写真10, 15)。後門は引違い障子で戸締りする。

内陣余間境及び余間飛檐間境には敷鴨居を通し、釣束を入れて内法長押をつけ、内陣余間境では、内法長押上を開放する(写真17)。

余間奥の仏壇前には渦、若葉、袖切、欠眉つきの虹梁を渡し、中央に無地の板敷股を入れ、虹梁上を壁とする(写真8, 9, 18, 19)。



写真7 広縁と向拝柱

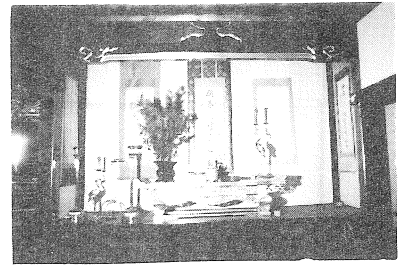


写真8 北余間奥の仏壇

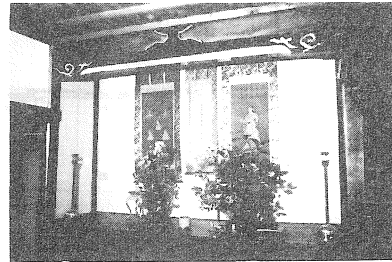


写真9 南余間の仏壇

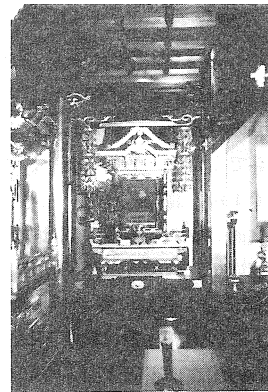
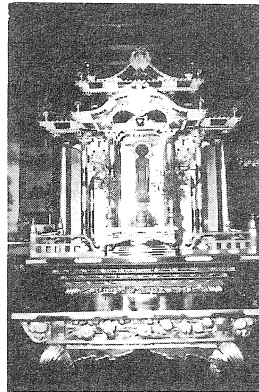
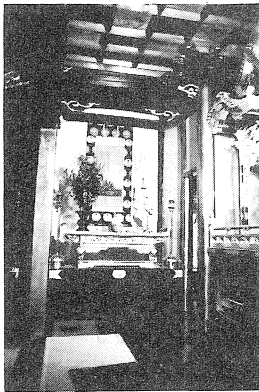


写真10 内陣奥の配列

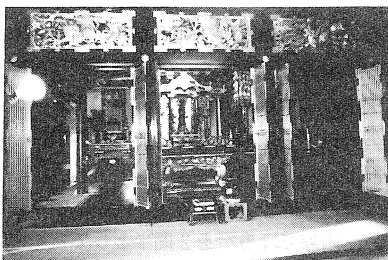


写真11 内陣正面

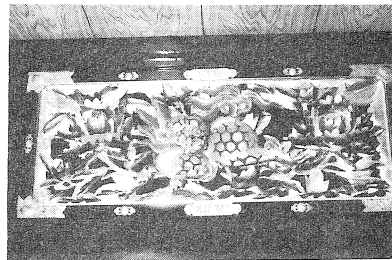


写真12 同上向って右上欄間



復元的考察

現状は前述の通りであるが、これを復原すると、前面  
 広縁の向拝は嘉永の附加であり（材が新しく、寺伝にも  
 よる）、正面の中央入口は内法を一段と高めて楣を入れ  
 （写真7、中央柱2本の内側に楣と菓座を切った痕跡あ  
 り）、元来唐棧戸を釣ったものであり、その他の各面の  
 柱面に方立の取りついた釘穴があり、引違戸であった。  
 側面も3本溝の鴨居が残っているので、雨戸を用いず戸  
 2障子1の戸締りであった。

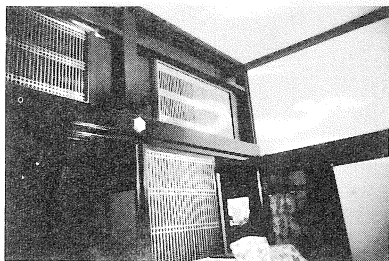


写真14 余間前柳格子と箆欄間

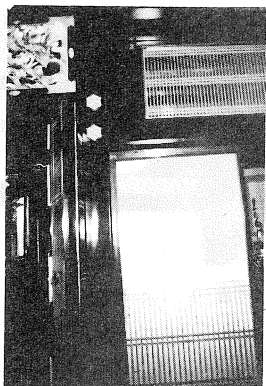


写真13 内陣余門境（正面）

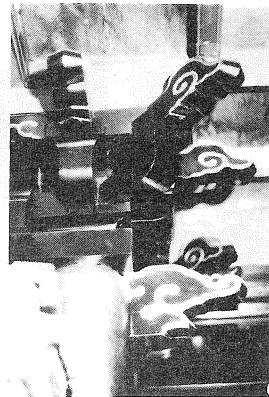


写真15 来迎柱上斗拱

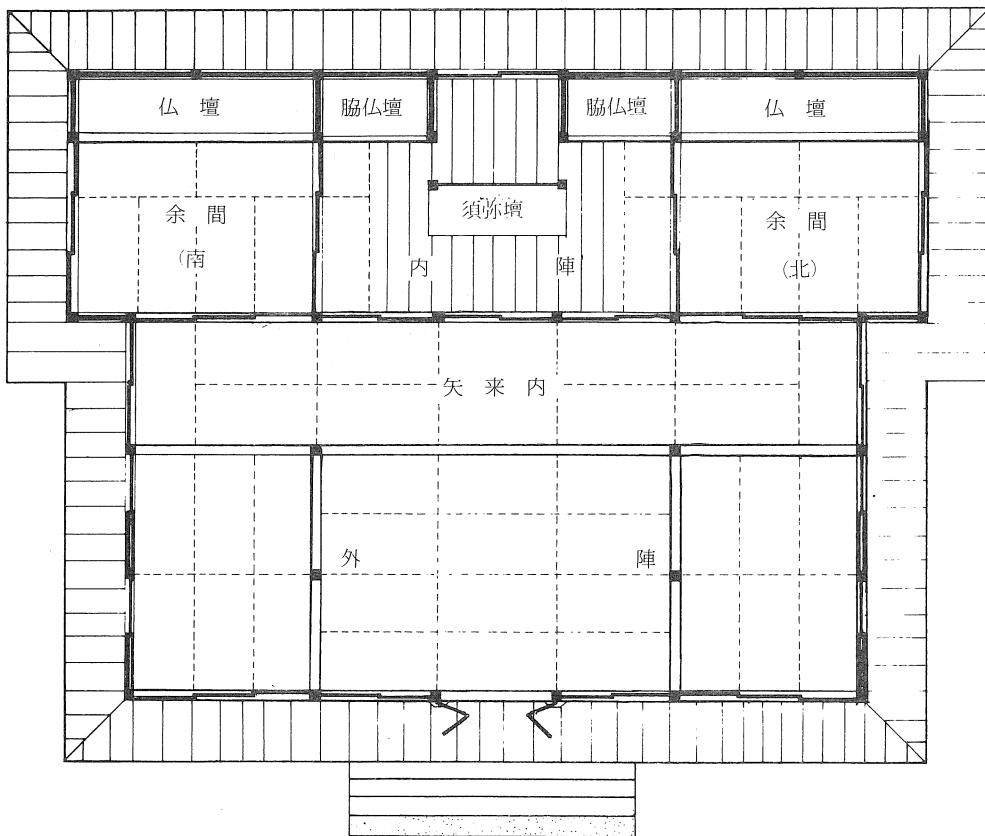


図2 行徳寺本堂復原平面図

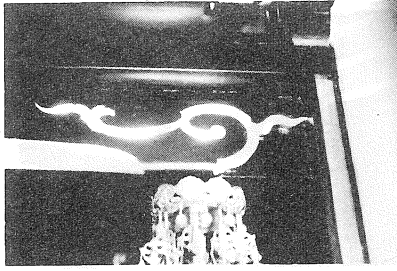


写真16 北脇仏壇虹梁

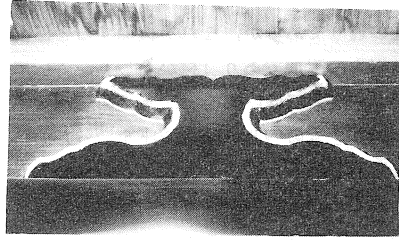


写真18 余間虹梁上の板葦股

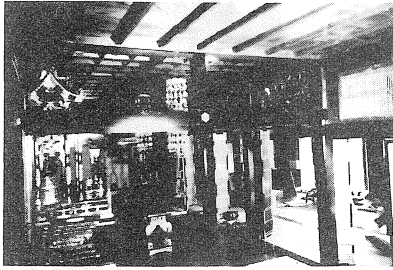


写真17 余間内陣境



写真19 余間虹梁の絵様

内外陣境の鴨居には覆板を打って溝を隠しており、元は引違い格子戸であった。余間前は内法貫をみると開口が1間半で中央に釣束があったことがわかり、矢来通両端柱の余間に対する面に小壁の痕跡が残るので、矢来内も半間内で終わっていたことが知られる。

また内陣余間境の内法貫にも元の長さ1間半で中央に釣束があった痕跡が残るので、内陣余間の奥行も1間半となり(図2)、内陣の脇仏壇も余間の仏壇の列にあったことが、柱に仏壇框や虹梁の取付いていた埋木が打診されて知られる。となると仏壇も1間前方に移ることになるが、今その位置の床下には床束が立つ。又現北脇仏壇の2本の柱は元の後門両脇の柱とみられ、南脇仏壇裏の2本の角柱には漆を塗った面もあり、仏壇のとりついた痕跡もあって移転した元の来迎柱と見られる。仕口から見て仏壇も和様の簡素なものと同推察され、恐らく斗拱

も用いなかったであろう。天井は不明乍ら余間と共に恐らく棹縁天井であったろう。このように無理な仏壇の配置はすでに本尊を下付されていたため生じたのであろう。

#### 結 び

この二つの堂は江戸中期の三河における本願寺系の浄土真宗寺院本堂であるが、復原するといずれも内陣余間の奥行が浅い形式となる。しかし徳正寺(旧入覚寺)本堂の内陣が一直線仏壇となり、余間が左右非対称となって北余間が客間の形式を思わすものとなる古形式を伝えるのに対し、行徳寺の方は既に仏像を下付されていた関係で、内陣余間の奥行が極めて狭くなるのにかかわらず、来迎壁や須弥壇ができ、後門もあって寺らしい性格を具えていることは注目すべきで、小寺院本堂平面における過渡的な現象と見ることができる。